『教行証文類』の世界　第二十五回

顕浄土真実行文類二（十二）

高田短期大学名誉教授　栗原廣海

一、一乗真実の利益

前回は聖人が『無量寿経』「流通分」の、いわゆる「弥勒付属の文」から、

仏、弥勒に語りたまわく、「それかの仏の名号を聞くことを得て、歓喜踊躍して乃至一念せんことあらん。まさに知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功徳を具足するなり。

を引文し、文中の「乃至」について「一多包容の言なり」と解釈されたことについて考えました。今回は、「大利」と「無上」に対する解釈について考えてみたいと思います。「乃至とは一多包容の言なり」に続いて次のように言われます。

大利というは小利に対せるの言なり。無上というは有上に対せるの言なり。まことに知んぬ、大利無上は一乗真実の利益なり。小利有上はすなわちこれ八万四千の仮門なり。

（「大利」というのは「小利」に対する言葉であり、「無上」は「有上」に対する言葉である。これによって、「大利無上」とは、本願一乗の法のもつ真実の利益をあらわし、「小利有上」とは、自力聖道門の八万四千の法のもつ方便の利益をあらわしている）

『無量寿経』の文には、仏の名号である「南無阿弥陀仏」のいわれを聞いて信じよろこび、たとえわずか一声でも念仏する人は、大きな利益を得てこの上ない功徳を身に具えるのである、と言われているわけですが、聖人は、この念仏がもつこの上ない利益・功徳を、八万四千の教えをもつ二乗・三乗の自力聖道門の方便の利益・功徳に対して、「一乗真実の利益」とおっしゃっています。

「一乗」の「乗」とは、「仏の教え」のことです。仏の教えは、衆生を迷いの世界から悟りの世界へと運ぶ乗り物であるから「乗」と言うのです。その乗り物は、乗る人の資質によって異なると言う考え方から、二乗・三乗が説かれました。二乗とは、声聞乗と縁覚乗で小乗の行者のための教え、三乗はこれに大乗の行者のための教えである菩薩乗が加わります。「八万四千の法門」というのは、これら資質の異なる人々に対し、それぞれに適した仏道を歩ませようと説かれた数多くの教えのことを言うのです。それに対して「一乗」というのは、「一仏乗」とも言われ、資質の違いに関わらず、どんな衆生も平等に仏になることができると説く教えのことで、『法華経』を中心に置く天台宗で特に強調されました。親鸞聖人は比叡山で修学されましたから、『法華経』の説く一乗は熟知しておられたはずですが、ここに言われる一乗がその一乗でないことは、いまさら言うまでもありません。

『正像末法和讃』第五十五首（顕智本）に、

釈迦の遺法ましませど
修すべき有情のなきゆえに
さとりうるもの末法に
一人もあらじとときたまう

とあるように、教えはあっても、末法の世ではだれもまともに修行するものはいないから、さとりを得ることのできるものはだれ一人いないと聖人はおっしゃっているのです。一乗を説く『法華経』の教えも例外ではありません。聖人にとっては『法華経』の教えも八万四千の教えのなかの一つなのです。

聖人にとっての一乗はそれこそただ一つ、弥陀の本願念仏の一乗、つまり「誓願一仏乗」なのです。念仏のみが、末法においてすべての人を平等に仏のさとりに至らしめる利益をもった唯一の真実なのです。では八万四千の法門は、末法においては全く意味のない教えなのかといいますと、そうではありません。聖人は、『一念多念文

意』の中で、

八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門という。これを仮門と名づけたり。

ともおっしゃっています。浄土に生まれ、仏になるための行は唯一、「一乗真実」である本願の念仏、これのみですが、ここへ導く手だてのはたらきをするという限りにおいて、八万四千の教えは意味のある教えであると言われているのです。それで「小利有上」、「浄土の方便の善」と言われているのです。無意味な教えとして否定しておられるわけでは決してないことに注意しなければなりません。

二、専心と専念

次に聖人は、『観無量寿経疏』の中で「専心」「専念」と言われていることを紹介し、この言葉について解釈しておられます。

釈に専心と云えるはすなわち一心なり、二心なきを形すなり。専念と云えるはすなわち一行なり、二行なきことを形すなり。今、弥勒付属の一念はすなわちこれ一声なり。一声すなわちこれ一念なり。一念すなわちこれ一行なり。一行すなわちこれ正行なり。正行すなわちこれ正業なり。正業すなわちこれ正念なり。正念すなわちこれ念仏なり。すなわちこれ南無阿弥陀仏なり。

（善導大師が『観経疏』に「専心」と言われたのは「一心」のことであって、二心のないことをあらわすのである。「専念」と言われたのは、一行のことであって二つの行を並べて行わないことをいうのである。いま、『無量寿経』の「弥勒付属の文」に説かれている「一念」は、すなわち「一声」のことである。一声とはすなわち「一念」のことである。一念とはすなわち「一行」のことである。一行とはすなわち「正しい行」である。正しい行とはすなわち「正定の業」である。正定の業とはすなわち「正しい念」のことである。正しい念とはすなわち「念仏」である。念仏とはすなわち「南無阿弥陀仏」である）

善導大師の『観経疏』の中には、「専心念仏（専心に念仏し）」という言葉が四回ほど出てきます。聖人がこの「専心」について「専心と云えるはすなわち一心なり、二心なきを形すなり」と言われるのは、念仏する心が余念のまじわらない一心であること、すなわち、疑念のない信心の心で念仏すべきことがあらわされているとされているのです。

また、「専念」については、「一心専念」という言葉がやはり四回出てきます。そのうち三回は「一心専念弥陀名号」と言われるのですが、その中の一つに有名な次の一節があります。

一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故。

（一心に弥陀の名号を専念して、行住座臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを正定の業と名づく、かの仏願に順ずるがゆえに）

法然上人が専修念仏を旨とする浄土宗を開かれるきっかけとなったきわめて重要な言葉です。

ここには、疑念のない一心で「弥陀の名号を専念する」と言われているわけですから、「専念」は称名念仏の一行のことで、他に往生成仏の行はないことをあらわしていると聖人は言っておられるわけです。

「弥勒付属の文」に説かれる「乃至一念せんことあらん」の一念は、一声に無量の徳をそなえた称名念仏の一行のことであり、それは正しい行であって、正しく往生が定まる行い、つまり右の「散善義」に言われる「正定の業」なのです。正しく往生が定まる正定の業は、心に弥陀の本願を信じ、口に名号を称えることですから、それは「正念」であり、すなわち「念仏」であると言われるのです。心に本願を信じ、口に名号を称えるということは、「南無阿弥陀仏」が私にはたらき、そうせしめている具体的なはたらきですから、最後に「すなわちこれ南無阿弥陀仏なり」とここの釈を結ばれるのです。